

氏名（本籍）	細井 匠		
学位の種類	博士（リハビリテーション科学）		
学位記番号	博甲第	7392	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	精神科病床における転倒予防対策に関する研究 —統合失調症患者を中心に—		
主査	筑波大学教授	博士（医学）	高橋 正雄
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	川間 健之介
副査	筑波大学教授	博士（保健学）	小澤 温
副査	筑波大学准教授	博士（学術）	山中 克夫

論文の内容の要旨

本論文は、わが国の精神科に在院中の統合失調症患者の転倒事故とその対応の実態を明らかにするとともに、有効な転倒予防対策を明らかにして、実践的な提言をすることを目的としたものであり、全国の精神科病院を対象に行われた実態調査、精神科に在院中の統合失調症患者を対象に行われた予防的な介入の効果に関する研究、統合失調症患者の身体機能の自己認識の障害と転倒の関係に着目した研究など、8つの研究から構成される。

そのうち、全国 747 の精神科病院の医療安全管理委員会を対象にした調査では 247 病院からの回答が得られたが、その結果、1年間で病床数の約半数の転倒事故が発生し、入院患者の 4 人に 1 人が転倒しているという実態を明らかにするとともに、転倒予防対策はほとんどの病院で行われているものの、その内容は室内の環境整備や履物指導などにとどまり、転倒予防に有効とされる筋力トレーニングやバランス練習などの運動療法の実施率は低いという実態も明らかになった。また、全国の 934 の精神科病院の作業療法責任者を対象にした調査では 449 病院からの回答が得られたが、その結果、高齢者や身体に障害のある患者を想定して設計されていない多くの精神科病院では、「段差がある」、「手すりがない」などの環境面での転倒危険因子があると同時に、相変わらずサンダルやスリッパを履いている者が多いという点でも、転倒リスクの高い状況が続いていることが示された。さらに、精神科病院の作業療法責任者は、身体的リハビリテーションの必要性が高いことを認識しつつも、実際にはほぼ半数が無償で身体的リハビリテーションを実施せざるを得ない状況にあるなど、制度上の問題が大きいことを示唆する結果も得られた。

次に、著者は、自らが理学療法士として勤務する都内の精神科病院における 2002 年から 10 年間の転倒事故を分析した結果、入院中の統合失調症患者では 50 歳代から転倒する者が増えるなど、地域在住

の高齢者と同程度の転倒が、より若年から発生しているという状況のほかに、転倒する方向や転倒する状況などには、前方に倒れやすいとか、食事などの混雑時に他患との接触事故が多いなどの特徴があるために、精神科病棟に入院中の統合失調症患者にはこれらの特徴に配慮したきめ細かな対応をする必要があることを示した。また、著者が中心になって 10 年に及ぶ運動療法を含む転倒予防対策を行った結果、この間に入院患者の高齢化が進展したにも関わらず、介入から 3 年間は、運動機能が保たれ、転倒発生率の上昇も抑制されるという効果があったことを示している。

さらに、こうした実践的な活動の中から、統合失調症患者の転倒には身体機能の見積もり誤差が関与しているのではないかと推測した著者は、実際に入院中の統合失調症患者では、同年代の健常者に比べて見積もり誤差が大きいことや、統合失調症患者の中でも転倒者ではさらに見積もり誤差が大きく、自分の最大歩幅を過大評価する傾向があることを示したが、その一方で、この見積もり誤差を改善してもそれがただちに転倒率の減少にはつながらないという限界も明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、近年、入院の長期化と高齢化が進展する中で、これまでその実態が明らかにされてこなかった精神科病院における統合失調症患者の転倒事故に関して、わが国では最初の全国レベルの調査を行ってその深刻な実態を明らかにするとともに、転倒予防対策を実施する上での制度上の問題も明らかにした論文である。また、著者は、入院中の統合失調症患者の転倒の特徴や、その背後に想定される身体機能の見積もり誤差という問題を明らかにし、これもわが国では初めて理学療法士として 10 年間に及ぶ運動療法を含んだ転倒予防対策を実施して、一定の効果を示したという点においても、その独創性や臨床的な意義を評価しうる論文である。本論文は、精神科病院に入院中の精神障害者を対象とするなどの臨床的な制約もあって、介入研究が一施設の少人数に留まるといった限界はあるものの、今後益々その重要性が高まるであろう統合失調症患者の転倒問題に対して、具体的なデータに基づいて制度上の改善を含む現実的・実践的な提言を行ったという点において社会的インパクトのある論文であるのみならず、介入事例を増やして実証的な検討を行うなど、より一層の発展が期待される論文でもある。

平成 27 年 1 月 21 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（リハビリテーション科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。